

テコをてばなす

ながたかずひさ

一 テコとは

■ テコ？

はいまいど、ながたです。本日はまた、よくわからないお話に一席お付き合いたいと思います。今回はいつにもましてまとまりがありませんので、どうぞ気楽にお聞き流してください。

最近「レバレッジ」なんて言葉を小耳に挟みません

か。「テコ」を掛ける、例えば金融商品において他人の資本を利用して自分の資本を増やしたり、「自分の力以上のことをする」ことを「レバレッジを掛ける」なんて申します。

新車買ったんですよ。超ウキウキでそこらじゅう用もないのに走ってまして、前の車とあそこが違うここが違う、これが楽しいあれがたまらない、と一人で悦にいつてましたんですが、ある瞬間突然、ハタ、と思いだった。

「これはクルマが偉いのであって、僕は一ミリも成長

してないんじゃないか？」

つまり新しい「テコ」が優れているのであって、テコを動かす「僕自身」は変化してない。

こう書きますと「なにをあたりまえのことを」と皆さんお思いかもしれません。ですが皆さんも、実はそれぞれそれぞれの生活の中でこういう、「勘違い」をしたりしてませんか。

「テコ」は生活の道具に限りません、知識もそう、体

験もそう、感情でさえそう。新しく友人ができたことも、新しいお店を見つけたことも、そこへ行くことも、知らないメニューを頼むことも。

いやいや、新しくなくても、馴染みの喫茶店で珈琲一杯を飲む、これも「テコ」です。本来掛けなくてもなんの問題もないレバレッジをわざわざ選択的に、自分の生活に掛けている。

テコを掛けさせる欲望、執着、怠惰、羨望、焦り、恐れ、怒り、疲労……それらも、自ら意図して手に取ったものではないにせよ、自分自身ごと自分の周りの世界を動かしてしまっている、テコです。

こう捉えた時に、あつ、これはなかなか面白い認識だ、と思いました。

現代に横たわる猥とした不安やなんとも言えない物足りなさ、これをこれで説明できるかもしれない、と考えたのです。

五年ぐらい前から、僕は焼肉店へ行くたびに炭火の上で真っ赤に輝くお肉を見つつ、「こんな贅沢をしていいのだろうか」とごく軽く凹むようになりました。

つまり僕は、なにもしてないのです。

二十数年前、初めて自分でバイトなりでお金を稼げるようになった時と同様、四千円なり五千円なりを財布から出すだけで、こんな贅沢な、そう、世の中はデフレだ日本はダメだと言われつつも確実に進歩し続けており、美味しいお肉がおなかいっぱい、食べられるのです。

僕何もしないのに、体験だけブーストアップして

るんです。

つまり、テコだけが、僕の意志とも意図とも努力ともまつたく関係なく、巨大に有効に優秀になって、ゴリゴリ効いてくれて、素晴らしい体験が現前に出現する。

そこに、喜びがありますか。

実は、無いんですね。

正確に言うところなんです。バイトで稼いだお金で友達と「旨い肉でも喰いに行こうぜ！」と少し大人にな

った気がしたあの時と、同じだけは。でもそれに上乘せされてる美味しさとかサービスとか珍奇な体験分は、僕関係ない。

そう、この現代の不安や戸惑いの源泉は、僕らを取り巻く多くの「テコ」が、僕らの意志とか意図と関係なく極めて巨大に強烈な効果を持つようになってしま

い、
「このテコを使いこなせるんだらうか？」

「こんなテコ俺は必要ないのに……」

果ては本当に、手にしたテコの操作を間違つて、とて

も痛いしつぺ返しを食う。

ちよつと twitter に「お酒呑んだけどクルマで帰る
〜」とポロリと呟いただけで、全ての社会的地位が抹
殺される。

そんな無茶苦茶な話がありますか。

twitter というテコさえ無ければ、何事も起きなかつ
たはずなのに。

こういう状況そのもの、からくるのではないかと。

デイストピアもの、というジャンルがあります、S
Fでもファンタジーでも、全面核戦争やコンピュータ

の反乱によって人類が原始的な段階に後退させられ、そこでその世界そのものに立ち向かったり、死後の世界のような静かだけど生気のない暮らしを描いたり。

「風の谷のナウシカ」「MATRIX」、類例を挙げればキリがありません。

ですがこうして見れば我々が直面してるディスプレイア（の予兆）は核やマザーコンピュータが原因ではなく……いや、それらも現実に一因になってしまってますが……この、「制御不能なテコに取り囲まれている」という状況そのもの、ではないですか。

それらは、テコ達は幸せの顔をしてやってくる。幸せを運ぶフリをして、いや事実幸せ「も」運んできてくれるけど、不幸も同じように運ぶ。

大きな匙が、薬も毒もたっぷり口に注ぎこんでくれるように。

■進化しすぎたテコ

……と、こう書くと 「科学は道具であり使い方次第

では云々」という七〇年代公害・オイルショックぐら
いから延々と言われていることの繰り返しのようですが、
もちろん、科学も「テコ」に含まれます。

その科学技術が最も典型的ですが、日本で言えばバ
ブル崩壊つまり九〇年まで、我々を取り巻く各種のテ
コはほぼ、「新しいほど強く正しい」ものでした。

人々は新しいテコが開発されるたびにそれに乗り換え、
それを使って生活を豊かに——なにをもつて「豊か」
というのは難しいところですが、少なくとも非貧困、
安全や健康が貧しさによつて損なわれない、という状

態は「豊か」と言っていると思います——してききました。

ですがテコ達の「絶対性能」みたいなものは徐々に頭打ちになります。

余談ですが頭を打った要因は人間の「身体性」ではないかと思えます。人間という生物はだいたいサイズも寿命も必要エネルギーも生活リズムも決まっております、このくびきから逃れることはできません。どんなご馳走でもあるカロリーを超えては入りませんし、豪華な

ベッドルームがいくつあろうと「寝て一畳」です。

これを超える過剰な部分に対して、最初は新奇で得難い体験として珍重し興奮しても、徐々に「それはいつもやることではないよね」というごくあたりまえの「カラダの欲求」に従うようになる、のが自然なことです。

ステイブ・ジョブズ氏、Apple社の、は、物凄いお金持ちですが、普段過ごされてる書斎はごくフツツの、我々と変わらないものです。それは質素儉約とか謙譲の精神（だけ）ではなく、「それがジャスト」だからです。

その後二〇年ほど、テコは多種多様に枝葉を拡げ個性を持つ、つまり上ではなく横に進化の幅を拡げました。

「はやり」にとっても弱かった日本人が、衣服にしる音楽にしる趣味にしる、多様性を爆発させた、少なくとも個性を表に出すことをためらわなくなった、のがこの時期。

インターネットというデバイスやシステムがそれを後押しした、というよりもむしろ、そういう欲求、

「自分にあつたテコが欲しい」という希望があつたからこそ、それに適した道具であるネットが急激に受け入れられた、ようにも思います。

それまでが絶対性能追求の時代なら、これは多様化と効率化の時代でしょう。

こうして各種のテコを手に入れた我々ですが、気がつけばこのテコたちは勝手に進化を続けています。

より強力により効率的に。

進化というのはどうやら、物理法則のようにある条

件が揃うと（自由競争やお金（利益）の流れなど）に勝手に掛かるドライビング・フォースで、前述のように「僕何もしてないのに」お肉が美味しくなっていました。

ここに至って我々は、大変強力なテコに取り囲まれその選択を迫られる、という人類前代未聞の状況に追い込まれた、のかもしれない。

なにかの生活習慣病にでもなれば今は、お医者さんが「あれとこれとそれと治療法があります」と提示し

てくれます。

どうしろというんですか。

テコ（この場合は治療法）が強力であるがゆえに反作用も強力で、いい結果も悪い結果も鮮やかに出ます。だから、医師は選択の責任を患者側に投げ渡している。ロクに効きもしない薬草を擦つてた時には考えられない事態です。

でも我々にはその頃の記憶がまだあつて、「その選択まで含めて治療じゃないの!？」と逆ギレしたりします。

テコが強力になったがゆえに誰もがそれを振るう（そして生じる結果の）責任を負いたくない。だからできるだけ当事者に押し付けようとする。

「自己責任」という言葉がよく使われ出したのは結局、こういうところに原因があるのではないか、と思います。

外国の危険な地域でボランティアが武装集団に囚われた。

人命は何より大切です、国が我が国民を助けるため手を尽くす、それはわざわざ言及するまでもない当然

のことです。

ですが例えば豊かな日本が身代金というテコを使つたとすれば「その金は税金ではないか」「同種のテロを誘発する」と批判は免れません。ネットなりマスクミなりというこれまた強力なテコを使つて「世論」というテコが噴き上がるでしょう。当然のことをしたのに政府の支持率が下がるかもしれない。

だつたら、彼ら当事者にテコの根本を渡し返すという行為……つまり自己責任という呪文を唱えること、こうなるかもしれないテコを使ったのは彼らなのだから、そのテコを使ったことに問題があつて、わしや知

らん、とほっかむりをする、しようとする。

テコを使うのはいつの世でもどんな場合でも簡単な
んです。

なんとたつてテコなんですから。というより、小さな
力で大きな効果を出すものをテコと言います。

でもあまりに強力なテコは、制御できないほどバカ
でかいアウトプットが出てしまう。

グローバル化・IT化・ネットワーク化がその傾向
に拍車を掛けます。地球の裏側で蝶が羽ばたいてハリ

ケーンが起きる、のが冗談ではなくなつてきています。

先の例で言えば身代金を出せば瞬間に情報が共有されて、世界中のあらゆる状況に居る日本人が危険に晒される、かもしれない。

誰もが（意識的・無意識的に）テコの効用におののいて、結果として思考停止・先送り・責任転嫁をするようになります。

それら一般的にマイナスの後ろ向き精神行為がこねまた、後ろめたさと積然としない気持ちを鬱積してしまふ。

いつたいどうすればいいんでしょう。

■ならば、「てばなす」。

ちよつと話が大きくなりすぎたので縮めてみます。

昨今のスマホ狂騒曲なんかがいいでしょうか。

あれはもう、初めての人には機種なんて到底選べないですよ。どれも同じような形と雰囲気。ガラケ

ー時代ならまだ色形触感、フタ開けて現れるキャラクタ―にキーの打ちやすさ、なにか「取っ掛かり」があったものですが、今はもう。

となると、「どれがいいの?」と、選択というテコを他人に丸投げする。「そういう場合はスタンダードに〇〇でいいんじゃないの?」でも人間、テコを振るうことを完全に諦めたくはないので、「でも××とか名前よく聞くし……」 「もうガラケーのままにしとけ!」

そう、テコには「使わない」という選択肢が、ある

のです。

ちよつと詭弁じみてますが、「使えない」のは「使おう」とするからであつて、「使わない」なら使えないというストレスは、無いんです。

「えつ、でも、世間に乗遅れる！」

ホントですか？ あなたの周りのスマホユーザーはそんなにあなたより先へ進んでますか？ 便利で快適で毎日がハッピーそうです？

むしろずーつとあのちつちやい画面覗きこむ時間が

増えて、可哀想な人じゃないですか？

（もちろん僕も大変可哀想な人です）

もう、そんな、人生や生活を薔薇色にしてくれる強烈なテコなんて、そう簡単には現れないですよ。

もしそんなものが現れたら、しばらくすればうまくこなれて、テコと意識せずとも手にしている日が来ます。

あなたの手元のその携帯電話のように。

僕がこの、「テコ」という認識の仕方をした時に思

ったのが、このことでした。

テコには、僕の例で言えば、クルマには、Aというクルマを選ぶ、Bというクルマを選ぶ、の他に、乗らないあるいはどれでもいいと思うつまり、「選ばない」という選択肢がある。

「テコをてばなす」という選択肢を認識し、またそれを選択すること、ここまで述べてきたようなモヤモヤした不安から、解放されるのでは？

「でもそれ『先送り』じゃないの、さつきダメだつて

言った」

ここが難しいところ。

例えば……ポーカーでも麻雀でもいいのですが、

「先送り」というのは、いい手が無いのに最後までズルズル勝負に参加して、結果として大負けしたり嵩んだベツト分を没収されたりすることです。

「テコをてばなす」は勝負を降りて、「当事者ではなくなる」ことです。被害は最小限で済む。

「それでは利益が出ないじゃん！」というのが人類に長年埋め込まれた強迫観念で、テコがほぼ間違いない

良い物に進化し続けていた時代の、感覚の名残、ではないでしょうか。

先ほどのガラケーとスマホの例を見ていただければおわかりのように、「とにかくテコに手をかけ続けなければ損」という状況はもはやあまりない、のではないかな、と僕は思います。

あの、進化の早いパソコンでさえ、一〇年前の Pentium4で WindowsXPでも、web見てメールしてちよろつと表計算やワープロしてデジカメの写真印刷するには全然平気ですよね。

ここ数年で急にわれわれは、そういう時代に放り込まれてしまったように僕は感じます。

それともそれは、僕がおっさんになつて社会についていけなくなつただけでしょうか……

■「解なし」もまた解

今まではテコを「使いこなす」という考え方が主流だった、と思います。

パソコンを使いこなす。時間を有効に使う。などなど。

でもここまで複雑に、そしてひとつひとつの要素が深く難しくなってしまった現在、電話ひとつ買うのも難渋するいまとなつては、「使いこなす」ことにもものすごいエネルギーが必要です。

そうなると、

「使いこなしに掛けたエネルギー」 \vee 「得られた成果」という残念な不等号が成り立ちかねません。つまり、

エネルギーを掛けて使いこなすよりも、じつと動かずスルーしてコストもリターンもゼロ、が正しい選択。

「若者の」あるいは「消費者の」○○離れ、という話題がよくあります。

効率を見極めることに徐々に長けてきた現代の我々は、頭の中でパッと計算して、あるいは直感的に、「それに触れるよりも無視した方がいい」ゼロの方がいい、と判断してしまう、のではないのでしょうか。

もちろん、それだけでは人生面白くないのですが、

「やりたいこと」「やらなければならぬこと」「なんて生活にはたくさんあるわけです。

さして興味もない電話なんかにクルマなんかにお酒なんかにかに、一秒だつて使いたくない。もうなんでもいから一番安いので。一番売れてるのでええわ。

僕はこれは決して消極性とか、後ろ向き「諦め」ではなくて、「やる気」という人間にとって有限のリソースの再分配ではないか、と見ています。現にほとんどの人は、こだわる部分にはとことんエネルギーを費やしてこだわりまくってますか？

と考えると人々はすでにある程度以上、「テコをてばなす」という選択肢を無意識にも選択しているように思えます。

だったら同じように、「追い立てられるような嫌な感じを受ける『なにか』」については、それはもう手放す、降りる、諦める。

テコに触らない。

配偶者、というテコがあります。

ものすごくリスクが大きいかわりに、ものすごくリ

ターンの大きいテコです。

僕はそのテコに触れていないので、ゼロ・リターンで、そのかわりゼロ・コスト、ゼロ・リスクです。

今まで社会が「嫁はん貰えよ！」と圧力掛けてきてくれたのはおそらく、いろんな条件を考えて、配偶者が居た方がだいたいメリットが上回ることが多い、つまりどのテコでもいいからテコを効かせればそれなりに得るものがある、と。

ところが社会環境が変化してそうも言いきれなくなってきた。

ヘタなテコ掴んで家族を巻き込んでとんでもないこ

とになったり、テコを掴むことに必死になりすぎて良くないことに巻き込まれたり、するわけです。

だとすれば、「テコをスルーしてゼロ」という選択肢を積極的に選ぶことは（いや僕は積極的じゃないですけど！）間違いとは決していえない。

そんな感じで、多くの人がそれぞれのシチュエーションで、

「どのテコをどう使おうか」

という使いこなしに頭を悩ませるぐらいなら、

「テコをてばなす」

という手段を選びつつあるのでは。

■これでいいのだ

以上とりあえず概論です。

強力なテコに囲まれた私達は、その状況そのものに不安を覚えている。

「でもこんな使いこなせるかしら」
「使いこなさなくていいのではないか。」

ただそれがそこにあることを認め受け入れても、自

ら使おうとしなければいい。もちろん使わなければ間違
いも起こらない。恐れも不安も消える。ウルトラハ
ッピ。

なにか問題でも？

二 いろいろなテコ

■ テコと自然体

前段で例に挙げたのが現実の物体が多かったので、「テコ」は物質的なものをイメージしてしまうかもしれません。最初に言いましたように「なんでも」テコになりうる、テコである、と思います。

オバマ大統領の笑顔は常に同じだそうで、写真を重

ねてピッタリ同じ、みたいな画像を見たことがあります。

言うまでもなく政治家にとって「笑顔」は武器つまりテコですから、鍛えて手に入れた彼のテコ、です。このテコを使って他者、支持者と政敵とコミュニケーションを取る。

もちろんその笑顔に参る人も居れば、「目が笑っていない」と嫌う人も居るでしょう。テコはすべからず、作用と反作用がある。

この類のテコをあまり持たない、使わないことを

「自然体」というのではないかな、と思ったりします。

「自然体」と「生そのまま」とは少し、違いますよね。それはここ、自然体とは、決して抑制を掛けない、なんでも思ったまま感じたまま、という意味ではなく、感情なり感覚なり思考なりのある部分を必要以上に増幅・強調しないこと。

ひな壇にたくさんの芸人さんが並ぶトーク番組など観てますと、若い方ほど話に強調を掛けて語ります。それは精一杯おもしろく思ってもらいたい、という前

向きな気持ちからなのはわかるのですが、時に押し付けがましいですよ。

話は、それそのものとして面白い話が面白いのであって、話芸・話し方で嵩上げできる得点は知れたもの……というあたりが、経験を重ねると実感され、ベテランの落ち着きにつながるのでしょう。

「虚飾を廃する」とか、「いい人をやめると楽になる」とか、いろいろ言いますけども、特に人間関係において不要なテコを手放すことは、このようにむしろ魅力になる。

大きな作用が欲しい時に人間は、「テコを掛けねば」と作り笑顔を鍛えるわけですが、実は社会的生物である人間は普段からそれぞれにテコをそれなりに活用しており、むしろ「ノー・テコ」みたいなやり方が、ノーガード戦法のように有効なこともある。

戦法というのは「差異が作れるかどうか」が有効性に効いてきます。ベクトルはどっち向きでもよい。

■「テコ」と利子

銀行利子なんてテコはどうでしょう。

僕の母は団塊世代、つまり郵便局の定額貯金が八%半年複利なんて時代に青春を送ったものですから（一年預けるだけで倍になります）、今でも各種金融商品の利子にすごくうるさいです。

しかし皆さん御存知の通り、現在は超低金利時代。こないだなんか祖母の、一〇年以上銀行の定期に預けてたのを引き取りに行つたんです三五〇万ぐらい。本人来いって言うから足の悪い祖母を車椅子に載せてクルマ出して母と僕三人がかりで半日潰して現地で耳の

遠い祖母に何枚も何枚も書類書かせてついた利子三五〇〇円。

これぐらいなら、普通口座で塩漬けてた方がよかったですよね。

つまり、生半可な知識と思い込み、習慣でテコを掛けてしまわなかつた方が、よかつた。

銀行金利というテコはもう、無い。いや無いと言うと言ひ過ぎですが、以前のように抜群の効果を誇る魔法のテコでは、なくなつてゐる。

以前使ってた・効いてたテコが時代の変化で効かなくなっている、ということが、最近は特に状況の変化が早いものですからよくあります。

こういう事例もまた、「へ夕にテコに触るな」の考え方を補強してませんか？

■テコとオタク

テコをどう効かせるか、という点ではなく、テコそのものに興味を持つ、のが「オタク」だと思います。

僕もその性向が濃くあるのでよくわかるのですが、テコそのものの性能や機能を議論し、いいテコが欲しいと思う、それはある程度まではテコを使うならば誰しも思うところですが、あるところから作用や結果がどうしてもよくなつて、テコ自体を一生懸命愛でてしまいますね。

一例挙げると僕カメラ好きなんですけど、写真結構どうでもいいんです（笑）

ひどい話です、カメラというテコは、写真を撮る、

もう一段微分すれば「思い出を封じ込める」ためにあるのに、もうカメラが好き。

だから実用上意味のない細かい性能や機能でネット上で喧嘩して人生を浪費してるわけです。

でもプロや本当の写真愛好家はたぶん、本質を見ぬいて、「自分の表現にピッタリの道具」としてカメラを選ぶでしょうし、メーカーはそういう人向けにモノづくりをするでしょう。

ここにギャップが生じている。

オタクたちはいつまでも理想のカメラが出ないと愚

痴を漏らし、メーカーがうつかり耳を傾けてしまうと今度はカメラを道具にしていた人々から不満が出る。

こういうことが、多くなってる気がします。

あるいは、僕はサッカーも好きなんですけど、あれもいくらでもオタク化できるものでして、一時はシステム論や戦術論にハマってました。3-4-3だのハイプレスだのというヤツです。で、これが高じますと、「いやこのやり方で負けるのはおかしい！」とか言い出すのです。

おかしいものにも、負けたのは動かしがたい事実ですから、その戦術（テコ）がこの相手には効かなかつたのか、テコそのものが良くなかつたのか、でしょう。でもオタク的視点に囚われてしまっている時には、「テコが正しくて現実がおかしい」という結論を導き出しかねません。

これが「こんなにいいアニメが人気出ないのはおかしい」ぐらいだと別段問題は無いのですが、たとえば国の政策でこのような主客逆転が起きると悲惨なことになるわけです。例に挙げれば旧共産圏の計画経済な

ど。

計画つまりテコは無謬、間違つてないので、結果がおかしい。辻褄を合わせるために現実を歪める。

そんなわけは、常に、無いのです。テコ掛けておかしな結果が出たら、それはテコがおかしいんです。

このオタク的性向は、多かれ少なかれどんな人も持つものです。どこに出るか、は人それぞれ、出方も強く出る人弱く出る人いますけど、ほぼ誰にでもある、と思います。リュック背負つてアキバに出現するメガネ男子だけがオタクではありません。

「私はオタクではない」つまり「私はテコそのものに執着したりしない」という思いこみは、あんまり持たない方がいいのではないか、と思います。

いわば一億総オールタイムオタク化時代。ネットからタダ同然で簡単に手に入る豊富な情報がそれを後押しし、語り合える同好の志もその上にいくらかでも見つか

気がつけばすぐく大事なテコを、仕事に使わず床の間に飾るような「オタク行動」を、行ってるかもしれません。

■テコとマーケティング

悪い人、いや頭のいい人って居るんですよいつの世でも。

世界にこういう「巨大なテコ」が溢れてくると、そのテコを巧く使って、自分の目的を達しようとする。

ステルスマーケティングとまでは言わなくても、本来「ニュースバリューがあるから取り上げる」はずの

マスメディアやネットコミュニティに対し、（対価を払ってでも）「取り上げさせることでニュースバリューがあるかのように思い込ませる」という逆転の手法は、あたりまえのように使われています。

その先端にあるいくつかのコンテンツに対して、以前はあまり存在しなかった「反発する人」が少なからず居るのは、たぶんこの「テコの不正利用」とでも言うべき——不正と言うといいすぎかもしれないかもしれませんが——「そういう使い方は止めてくれ」という無意識の抵抗、のようにも思えます。

こういう使い方をされると、今までの世界認識を一八〇度変える必要がある。

TVに出てくるものは「いいもの」や「話題のもの」ではなくて、「いいものと思わせたいもの」や「話題になつてることにしたいいもの」にすぎない……という具合に。

もちろん今までだつてそういう部分はあつたわけですが、キャズムとかティップング・ポイントと言われるある限度を超えてしまった、ような気がします。

しかもそういう意図での行動なので、「あつかましい」わけです。極端に言うとおスパムメールと同じ、できるだけたくさんに押し付けて、少しでも引つかかる人が出ればOK。

そこも鬱陶しい。

しかもそれさえ想定内で、一銭にもならないアンチに憎まれようが熱狂的なファンから（むしろ抑圧されることで燃え上がる宗教心みたいなものすら人間にはある）たくさん稼げばいい。

もし、こういう「作られた」動きに巻き込まれたく

ない場合は、メデイアなり世間の雰囲気なりをテコと捉え、「テコ掛け過ぎのやつは怪しい」という目を持つておく、のがいいのかもしれない。

もうひとつ、バーツと何か流行ってる時、テコが掛かってる時には、そういうテコには触らない、近づかない、という判断もあります。

「赤信号みんなで渡れば怖くない」という時代は遠くなり、「みんなで渡ってる信号は赤」ぐらいの時代なのかも。

焦らなくても、本当にいいものならずつと残るので、

あとからいつでも、そのテコは手に取れますよ。

お祭りが楽しいんだ、祭りそのものはどうでもいいんだ、とハッキリ認識されてるならそれもまた良し。ノリで変なお面買ってあとで困るのも青春さ。

■テコと「みんな」

ということ、このテコ溢れ時代には、「みんながやってるから」という、以前なら判断コスト削減策と

して有効だった手法が効かなくなってきた、かもしれない。

前節述べましたように、仕掛け側がその心理を狙っているからです。

「どのテコがいいか」という調査・研究にも結構大きなコストが掛かるんですよね。だからそこから逃げるための、常に使える技として「みんながやってることを選択する」というのが「あつた」。特に日本では大変有効で、したがってよく使われていた。

でもそこを狙い撃ちしてくる人たちが居る以上、自

己防衛策としてはもちろん、テコを掛けないつまり、

「選択しない」。

みんながやってるから「やる」のではなく、みんながやってるから「ウエイト」。

「やらない」と決めるのではなく、ちよつと置いておく。勝負から（今は）降りる。

スマホの例なら、今（二〇一二年夏）はまだ「ウエイト」が半分ぐらいの人にとって正解だと思うんですよ。待ってればどんどん良くなるので、いったん立ち止まってみるのはどうでしょう。

ともあれ、「みんなやつてるから」テコは時代遅れだと思っています。

■むやみに同じテコ使わない

ここで華やかに「僕の『いいテコ判断法』をお教えしましょう！」と唱えることができれば、どんなにかこの小文の価値も上がるかと思うのですが、残念ながら僕には今のところ、そういう魔法の公式はありません。

せん。

いや、むしろ、この小文が訴えたいことは、「いいテコ」見破る魔法の公式はちよつと見つけ難かろうと思うからこそ、テコの選択を迫られたら「待ち」という選択肢を選ぶのはどうですか、というものです。

それぞれが得意な分野、興味のある分野で見つけ出した・磨いたテコはあるでしょう。

僕でしたら例えばサッカー観戦の時、「ボランチに注目！」とか、無いわけじゃないです。

でもそれがどこへでも・いつでも・いつまでも使えるかというところ、これが難しいのが現代。

たとえばある世代から上の方は特定の「メーカー」に絶大な信頼を置いてらっしゃいます。が、御存知の通り今はもう品質もコストパフォーマンスもマダラで、同じメーカーでもジャンルによつてベストバイもあればワーストバイもある。

「メーカーを信じる」というテコはもう、効果的ではないと思うんです。

■ テコと進化

そこで思いましたのが、最初に戻りますけども、なにかが「進歩してゆく」「効率よくなつていく」という「思い込み」を捨てることこそが、だいじなのかもしれない。

新しいテコの選択を迫られた時、我々がパニックに陥るのは、「そのテコを選べば方向はどうあれ良くなる」「裏を返せば」「このテコを選ばなければ取り残される」

る、損をする、不効率である」という前提があるから、です。

でもこの前提はもはや成立してません。

だから、「選ばない」という選択は決して損でも間違いでも現状維持という名の後退でもない。

最近、草食系とかフツメンとか、右肩上がり「でない」価値観を持つ人々が話題になります。

これはだから、決して悪いことでも情けないことではなくて、この「過剰テコだらけ」という最新の環境に合わせた進化ではないでしょうか。

政治においても、世界的に保守対革新の二項対立が成立しづらくなっていますように、新しい物好きも立ち止まることを強いられ、古い物好きも新技術使わずに居られない時代です。

「立ち止まることは退化だ」などと脅す文言がビジネス書コーナーに舞いますが、セイバーメトリクス流行りのメジャーリーグでも、強豪・フィリーズのマニエル監督（以前日本でプレーされてました）の野球は古色蒼然たるやり方だそうです。それでワールドチャンピオン。

オオサンショウウオだつて「ボクもう進化とかいいです」みたいな顔してますが、彼らはちゃんと生きていますよね、井戸の中で。

それは……勝利なんじゃないですか？

最近昼間にファストフード店などに居ますと、おばさま・おじさまの集団が通信機能つきタブレットを使いこなし、その板を中心に談笑したり趣味や遊びの計画を練ったりされてます。

夕方、女子高生達がそれぞれにガラケー握って、一生懸命あの小さい画面を見せあつたり読み上げて教え

てあげたりしてます。

いわゆる技術の跳び箱現象、おじさまおばさまはケ
ータイ文化についていけなかった（いかなかった）か
らこそ、その次の文化にポンと跳び乗れた。

「待ち」を選択したからこそ、次のもつといいテコを
容易に手に取れた、という例です。

三 テコとコンテンツ

■ テコと作品

僕は脚本などを描いています。

脚本に限らずエンターテイメントというものは、目標としては「人を喜ばせるもの」ですから、つまり「テコを掛けて人の心を動かすもの」だとばかり、思っていたんですね。

でもこうやって「テコ」についていろいろ考えてきますすと、その考えはちよつと違うようです。

作品そのものがテコで、それをどう自分の心に掛けるかは、受け手のみなさんに委ねる。

いい作品つまりいいテコは「効きがいい」のももちろんです。多くの人にとって「掛けやすい」とか、「掛ける気になる」さらに「知らない間に掛けちゃう」といった特質を持つ。

微妙な差ですが、作り手である僕が「効かそう」としてはダメで、「効くように作る」、というイメージ。

「いいパス」というのは敵陣を切り裂き受け手にピタリ、チャンス到来！というものです。

受け手に取れないパスはどんなに鋭くても意味ないですし、取れても敵陣の中央で孤立する場所に出してはそこからどうしようもない。

想いは込めるものじゃなくて込めるもの。

僕はテコ（作品）そのものの良し悪しについては随

分考えてきたつもりですが、テコがどう効くのか、その研究は意識的にしてきませんでした。

「ここ押せば泣けるやろ、うりや！」みたいなのは不誠実だと思ってたんです。

でも、読者さんにとって使い易いテコであればあるほどいいのは確かです。それは別に否定すべきことではない。

古典芸能でも、キャリアを重ねるにつれて「無駄な力が抜ける」とよく言います。作品というテコに対して、自分の力を無理にあるいは無駄に使うのではなく、

テコのままに力が伝わる様子なのかな、と思います。

しかし理屈が理解できたからって、次は効果的に実装できるかどうか、という身体的な・技術的な大きな問題横たわっているのですが……

■テコとイメージ

その「テコを掛けない！」と無理をすることも、その無理自体が余計なテコとして変な力で自分を歪めて

るわけでは。

無我の境地、「ありのまま」というのは難しいものです。「『考えない』ということも考えない」。

ただそれでも、モノとしてのテコをイメージすると、「あ、いま掛かっているかも」「ちよつと掛けすぎ？」と感覚的に捉え易い、気がします。

簡単な自己客観化と言いますか。

「わたし」が「気合い」というテコを仕事に差し込んで、動かそうとしている。

どのぐらいの大きさの仕事をどのぐらい動かそうか、

いま手にしてるテコのサイズは……そういう絵を、描いてみるんです。

僕が子供の頃読んだ科学マンガみたいな本に、テコの話がありました。アルキメデスが登場します。「テコと動かない支点さえ用意してくれたら、地球さえ動かして見せる」と大見得を切ります。で、実際彼の体重で動かすとなるとこんな長いテコが必要で、太陽系のこのへんに……と白いトーガ姿のアルキメデスが、テコの端に立ってるんですね。

すごく印象に残る絵でした。

厳密な計算なんかもちろんできませんし、見込み違いもあるでしょう。

でも大雑把な「感じ」はイメージできるかなあ、と。そしてもし全然イメージできないのなら、それは止めておいた方がいい。とりあえず触らない、という選択をした方がいい。

■強力なテコ

吉村昭先生の御本を読んでいますと、人間の心というのはテコを掛けられるのを待っているかのようなのです。

「高熱隧道」ではダム建設に当たる男達の、「戦艦武蔵」では武蔵建造に関わる人々の、「狂気」としか言いようがない異様なエネルギーと、単一方向にまっしぐらに向かう心のベクトルが描かれます。

「使命感」がテコになると、命もモラルも人間性も、そんなだいたいじなものさえ全部捨て去られる。

すごいんですよテコつて。

そして誰でもが、テコが掛かると、そうなる。

だから自分の心に自分でテコを掛けすぎると、変な方向に行つちやう可能性が、高い。

熱中することや集中することはいいと思うのですが、あくまでテコは作品そのものであつて、僕自身の心をぎゅうぎゅう埋め込むようなイメージは、持たない方がいいのかなあ、と思います。

作品作りというのはどんなコンテンツでもあるいは芸術でも、本質的に「のめりこませる」力があつて、つまり「作ること」そのものが強力なテコで、ほおつておくとズブズブ取り込まれてしまふんですね。

僕も人のこと全く言えないですし、これは批判ではないのですが、貧乏役者・画家の方が冷静な目で見ると「これはどうなのかな」という作品を延々作り続けておられたりするでしょう。あれつまり、作品作りそれ自体が生活の原動力、テコになって、結果は結構どうでもいいんじゃないでしょうか。

いや、本人はそうじゃないと思いますために「僕のは高尚だから理解されない」とか理屈つけるんですけど、ポイントはそこじゃない。

だから、まわり大変だけど本人はとても幸せな状態

じゃないか、と思うのです。

■ テコとパンツ

作品作りには「パンツを脱ぐ」なんて表現がありません。エエカッコすんなと。イメージをできるだけ撫で回さず弄り回さず、内臓を見せるような恥ずかしさがあったとしても、ヴィヴィッドなまま出してこいと。

これすなわち「変なテコ掛けるな」ということです

よね。

物理的な技法やお約束事、また流通してて便利な「記号」がたくさんあつて、そうこうちつちやいテコをこちよこちよ掛けると、「それっぽい」作品が効率良く量産できるんです。

でも、受け手にすれば、もちろん僕自身も受け手になれば、そんなもん観たくもない、ですよね。

もつところ、見たことないもの、ガツンとくるもの、溢れ出るパワー、これを持って来て欲しい。

しかし作り手に翻つてみれば、テコを外せば外すほど、不安になるのです。部品ひとつひとつ手作りしなければならぬし、それを理解してもらえるかどうか、わからない。

だからどうしても、テコ使っちゃおう。

でも、同じテコ（記号など）を使うと、常に同じ結果出ますので、安定している反面、飽きたり見透かされたりします。

ツリ目の小悪魔系のツンデレキャラが罵声を浴びせる。わかりやすいのですが、もはやありきたりです。

もちろんテコそのものやそれを使うことが悪いのではなく、安易に効果的だと思うものをバンバン使うのが良くない。

お医者さんなら効く薬はどんどん使っていていいですが、コンテナツは「差異がある」「これしか無い」というのが絶対の価値なので、効く薬つまりみんな使ってる薬、を使えば使うほど、埋没していく、わけです。

ありきたりなテコでもそこで使えば抜群の効果があるなら使えばいいですし、独特で素晴らしいテコでも使い所無いのに無理に使うと、臭みになります。

このへんはセンスとしか言いようがないのですが、浅いキャリアでパツと出てくる人は、ここが巧い人が多い、というかそういう人がパツと出てくる、というか「センスがある」と表現される、ように思います。

平凡な話なんだけど、ディテールはちよつと見たことないほど独特な細工で満たされてるとか、設定がぶつ飛んでてキャラとか結構無理矢理だけど気にならない、とかとか。

それは余談。

「パンツを脱ぐ」というのはこういうことで、生々しさを重視する、というような意味ではなく、「テコ外せ」ってことかな、と思う昨今です。結果として生々しくなりますけどね。

■テコと批評

ということ、マンガ・アニメ・ゲームなどオタク趣味方面で特に顕著なのが「テコの使い方合戦」みたいな、「記号」と言い換えればいいですかね、そうい

う競争と、それに対する批評です。

それあんまり意味ないんじゃないですかね。

もちろん純粹に技術が向上、高密度化高精細化しダイナミックレンジが広がりミスが減る、それは悪いことではないのですが、本質とはあまり関係がない。

「テコそのもののデキ」や「テコの使い方方の巧拙」にあまりこだわりますと、肝心の「テコで何を動かさそうとしたのか」、つまりテーマ、が見えづらくなります。

「本人が描きたいもの」がはつきりしてないと、やっぱりつままないですよ。なんでも。

人は政治家の演説を聞くとき、中身じゃなくて姿勢や熱意を聞いてるように思います。コンテンツに対する時もそうじゃないかな。

確かに、テコの巧拙や強弱だけで、いわば刺激で感覚を揺さぶることは可能は可能ですが、刺激は麻薬的にどんどん強力なものが必要になりますし、刺激の方法論は物理的にパクれますから、ますます差別化に

汲々としてしまいます。

それはレッドオーシャンですねえ。

ですからコンテンツや芸術について批評するときには、「この人テコでなにがしたかったんだ？」に踏み込むと、ちよつと濃い批評ができると思います。

■テコと龍之介

芥川龍之介先生の晩年の作に「蜃気楼」という小品

があります。人気というか、注目の高い作品ですが、そこまでの芥川システム、理知的で、構築的で、近代的なテーマを古い説話に巧妙に紛れ込ませるお洒落さ加減、とは全く違い、なんというか、「話のない話」です。

抽象的な言い方ですが、芥川先生は「鼻」から始まってずーつとこう、テコを振るつて、いいテコを適切に使いこなして、最大の効果を得る、そんな作り方をしてきたのではないか、と思います。あの「歯車」でさえ。

しかし有名な谷崎潤一郎先生との議論や志賀直哉先生の作品を読んだりして、あれだけとびつきり頭のいい人ですから、「ひよつとして『テコ無し』」というのもあるのか」とでも思い立って、試してみた作品、ではないでしょうか。

すごく穏やかで透明で、でもいわゆる私小説的な粘っこさやダウンー効果は無く、「きれいな」作品です。惜しむらくは芥川先生のこういうのもつと読んでみたかった、ですね。

また僕もこういう、「テコなし」作品をいつか描いてみたいです。おもしろくなりそうにないですけども
(笑)

四 テコと意識

■ テコと意識

と、いうようなことを考えてきますと、つまり「テコを意識する」と、必然的に振り回されることも減り、使い方もこなれ、選択も、選択しないを含めてうまくなる、ように思います。

「欲しいものは身体が知っている」なんて言いますよ

ね、食事の時、なにを食べればバランスがいいか、それは「欲しい」と思ったものを食べればいい、と。

そんなような感じで、「あ今テコ掛けようとしてるな」と思った時、どう、どのぐらい、あるいはどのテコを、というのは、その時の自分が一番よく知ってる。「ホントにこれでいい？」と思うぐらいなら掛けないとか、そういう細かい「Tips」まで含めて、生きてきた経験で「自分はこんな風に立ち回れば楽しい」ということをよく知ってるはず、です。

だから「テコの選び方」とか「テコのいい掛け方」に汲々としなくても、「テコだ」と思うだけで随分変わる。

バイクのコーナリングって、コーナーの出口を見つめるんですよ。あれ別のところ見てるとすごく曲がりにくい。

コーナーの全体像を目から捉えることで、アクセル、ブレーキ、車体の傾け方、そういうのを「勝手に」統合制御してくれるんです人間の脳はね。すごいですね。

そんな感じじゃないかな、と思うんです。

■テコと振るい方

先ほどこちよつと述べましたが、「外から掛かる大きなテコ」って、身を委ねてしまえば「考える必要」がありません。

そして考えること、判断することは、脳を激しく使うので、ものすごくエネルギーを喰い、つまりあんまりやりたくないことなのです。できれば人間、考えた

くない。

そこをつけこまれる。

信仰心もそうですし、正義感とか、「根拠が外部にあるもの」ほど強いのは、そのテコを振るうのが楽で、振るう根拠があるような安心感があり、また多くの仲間が振るってってくれるから、ではないでしょうか。

先日ある芸人さんのご家族が生活保護を不正受給しているのでは、という疑惑が持ち上がりましたが、僕はむしろその件そのものより、そんな小さな件で国民

全体が賛否両論、ブワーツと盛り上がったことにちよつと驚きました。

そんなたいそうなことですかあれ。

不正だつたら謝って返せばいいし、不正でなければ罰するのはルールをすり抜けた者ではなくルール自体ですよね。

もうだからあれは、それぞれがそれぞれのテコ、「バールのようなもの」をイメージしていただければいいと思いますが、それぞれの正義感で膨れ上がった黒々と長く大きなそれを振り回してですね、ガチンガ

チン暴れまわっているんです。マンガ「デビルマン」の最後の方みたいなもんですよ。

テコを振り回してるじゃなくて、肥大化したテコに振り回されてるんです。新車来たから走りに行きたくなる、核兵器持ったからボタン押したくなる。

そういう逆転現象に呑み込まれないようにどうしたらいいのか。

僕が最近自分を戒めてますやり方がひとつあって、「個人としての自分を担保にできない批評はしない」。

つまり僕個人が、その芸人さんの前へ行つて、（言
い方はあるでしょうけど）

「お前は間違つてる」

「あなたは正しい」

と言えるかどうか。

僕にはどちらとも言えません。状況詳しく知らないで
すし。

だつたら、何も言わない。

このやり方は結構応用が効くので、おすすすめです。

ある商社出の論客で、TPP賛成派の方は、反対派がほとんどの業界の集会へ呼ばれ、滔々とメリツトを説いて最後は拍手喝采を受けた、と言います。

喝采はともかく、そこへ乗り込める勇氣、自説に対する責任、言い換えれば「自分が振るおうとするテコに対する適切な認識」ができてこそ、唇寒しにはならないのではないかな、と思うのです。

（余計なことですが僕はあれもよくわからないので賛成反対どちらでもないです）

■ テコと本質

テコを掛ける、ということとは、テコでないもの、テコでは動かないもの、があるわけです。

これが「本質」と呼ばれるものなのかな、と。

クルマの「本質」って、「人が四人乗って時速六〇キロ以上で移動できる」ということに尽きると思います。

いま軽自動車が売れまくっている理由は、もちろんデフレ経済などいろいろあると思うのですが、おおき

な目で見ればつまり、クルマの「本質」はなにか見据えれば、余計なテコを掛けなければ、クルマは軽自動車ぐらいの物体で、「ジャスト」なわけです。

みんなそこに気づいてしまった、ので、経済状態とか生活環境とかあまり関係なく、老若男女「これでいいや」ではなく「これがいいや」と選んでる、ように思います。

古人の言葉に「欲しいものを買うな。必要とするものを買いえ」というものがありますが、「必要」が本質

で「欲しい」がメーカーが仕掛けるテコでしようか。子供が二人居る家庭には、ダイハツの軽ワゴンの方が、フェラーリのスーパーカーよりも「いいクルマ」です。

超あたりまえのことですが、ごく最近までメデイアや「世間」から雪崩のように襲い来るテコによつて、なんかちよつとでもいいもの買わないとダメなように思い込まされていた、わけですね。

「このぐらいの年齢でこのぐらいの収入ならこのぐらいのクルマに乗った方がいいだろう」。

そう考えると人々はそういう、「仕掛けられたテコ」を見抜く力は上がってるのかもしれない。

いや、クルマは、特に日本では、もう酸いも甘いも散々経験したから、多少の仕掛けには騙されない、だけかな。新興国ではやはり「豊かさの象徴」的な雰囲気持つクルマのほうが好まれるらしいですね。

ただ、バブルとその後の長いデフレを経験して、以前ほど購買行動では「踊らなくなつた」ようには思えます。

部分部分を見ればバーツと燃え上がるブームみたい

なものありますけども。

経験はおおきなテコですね。

でもテコである限り、これもまた安易に振るうとケガをします。

■テコと怒り

振り回してしまおうといえ、正義感にも通じますが、「かくあるべしテコ」というのは見えにくいわりにど

こでも現れ我々におおきく働く、強いテコだと思いません。

「かくあるべし」。なんでもいいのですが、たとえば机の上が片付いてるとか、それは誰かが勝手に、あるいは自分が勝手に決めたものであるにも関わらず、いったんテコにしてしまうとそれがひとり歩きし、従わされてしまいます。

この逆転現象はとても難儀です。

自分が描いたイメージに完璧に合致してないと、勝

手にイライラする。もちろん人間ですからミスも間違いも起きます。そのたびに、イメージと現実のズレに落ち込む。その繰り返しに精神的に疲れ、果てはうつ。

度を超したクレイマーと同じです、ギヤールギヤール喚く前にその商品を選んだのはあんだらろうと。今からお金返すから別の選べばいいじゃない。

つまりいいからそのテコを手放せ。それで問題は解決する。

真面目な人、しつかり者ほどこの罠にハマります。

自分もですけど、相手や環境に自分と同じように「きつちりしてることを当然のように求めてしまうので、それができてないとますます感情が荒れる。

アルボムツレ・スマナサーラ師の「怒らないこと」といういい書物があります。「『怒り』は自分が引き起こしていることなので、『怒らない』と決めれば怒らないのだ」と。

初めて読んだ時それは師が修行を積んだ高僧だから……と思いました。この「怒り」をテコだとイメージしてみてくださいはどうでしょう。

怒りテコがほんのちよつとしたズレ、そのつまずきを増幅しようとした瞬間、「これはテコだ」と思い返すのです。

でその、怒りというテコ部分を外して考えてみると、なんだ、別にコーヒーシヨップでおばちゃんに割り込まれたぐらい、まつ・たく・どう・でも・いいことではないですか。

この先入観、「こういう偉い人だからこそ、そんなことができるんだ」「感情をコントロールするなんてできるわけない」これらもまたテコです。

そういう既成概念や思い込み、理屈を外して、ほんとにやれないのか？ やつてみたことあるのか？ 完全ではないにせよやる方法ないのか？ どこまで詰めたことありますか？

これも、この小文の最初から「テコ」という非常にニュートラルなただの物体をイメージし続けてる理由のひとつです。

「怒りを意識する」と聞いた瞬間「うわ難しい」と反射で応えてしまいます。

でも「テコだと意識する」だったら？

やったこともないから難しいかどうかともわかりませ
んね。

と、なにかこう、別に視点・感覚で世界を観る一助
になるのかなあ、と思っっています。

■テコの肥大化

繰り返しになりそうですが、このテコが勝手にガ
ンと効いちやう理由、効かせてしまう理由、これをも
う少し考えてみます。

やはり人類はたぶん、進化してきているんです。

新しい道具、それは物理的なものでも、たとえば民主主義みたいなカタチの無いものでも、新しいテコを手に入ればそれはだいたい間違いなく優れていて、古いテコより優秀だったんです。

絶対性能も上がれば、最高効率も上がった。
だから、

「新しいテコが欲しい」

「テコを持ったら使いたくて仕方ない」

「使わないという選択肢は無い」

という習性が我々に染み付いてしまった。

場面場面で、「吾唯足るを知る」ですとか、「森の生活」ですとか、それこそヒツピームーブメントですとか、「それはなんかちよつと違うぞ」というカウンターは出てるのですが、結局、次々に現れる強力なテコがそれを呑み込む形で包み込んでしまつて、存在感を消してしまふ。

ロックがね、不良の音楽じゃないですかまあ言えば、それが、やらしい大人達の手で商業ベースに乗つて、

不良達はお金握って豪邸に住むわけですよ。でも詞は相変わらず「ガラス割って回ったー」。

呑み込まれてしまった。

でもこうやって次々に内包していくうちに、ついにテコは地球サイズになってしまつて、新しいものが生まれ難くなり、その巨大なテコを動かせる位置につける人間の数が減り、不公平が広がる。

アメリカのIT企業のトップが年収何百億円とかわけわからんことになつてゐるわけですよ。

どう考えてもおかしいですよね。

報酬は仕事の成果に応じて払われて、ラインで何時間残業したからこれだけアップ、一軒新規さん取ってきたからこれだけプラス、そういう理解しやすい世界ではなくて、「そのポジションについている」というテコで、信じられない金額が動く。

もちろん、その人の優秀性もあるだろうし、努力もあるでしょう、でもそれ、街で働くお父さんお母さんの、何万倍もあるんですか？　んなわけないですよね。

だからそれ、テコなんですよ。

巨大なテコの端っこに取り付くことができた、ほとんど運みたいなもので。

でかいのはテコであつて本人ではない。だからやつかむ必要もないし、逆に畏怖する必要もない。

余談ですが、ですから、社会の再分配システムを改良していくには、このテコの効きになんらかの制限を掛けるのがいいのかも、しれません。

ただジャンルによつては、そんなことをするとテコつまりレバレッジ規制の緩いところ具体的には新興国、

へお金や人材が流れてしまいそうですけど……

日本でも大店法やタクシー料金は果たして自由化がホントに良かったのかまだ議論されますが、やっぱり精査すると「テコ比率規制」掛けた方がいい部門って結構、ありそうですね。

■テコはずし

そんなこんなで、「ちよつとこれわけわからんな」と感じましたら、本質とテコに分けて考える、テコは

ずし、あるいは脱テコ、これを意識したいところ。

必要とするもの、かけがえのないもの、代わりのないものへ、意識を寄せて考える、感じる、決定する。

訓練というか、癖づけ、のような。

これでだいぶクリアーに見えてくる、ように思います。

認識だけでもスッキリすればストレスはだいぶ減ります。問題というものは、「何が問題かわかれば半分解けたようなもの」とよく言うではないですか。

■テコはしょうがない

「自分の力でどうにかできないものは、考えるだけ無駄」と気持ちをパチツと切り替えることができる羨ましい人がいます。

どうにかできないもの、これがテコですよ。僧兵とか鴨川の水とか双六の目とか。

テコにどうアプローチしようか、までは自分の意志

や力で決定できますが、テコそのものを変化させることは、できない。

だもので、「あれテコだ」と思ったらパツと手放す、ことができれば、だいぶ気持ちは楽になります。

できれば。

僕らですと売上とか評判とか……なかなか手放せないですよね……でも、しょうがない、んです。

だからその手前までは、がんばる。

■ テコと人間

交渉ごとでも、テコを振りかざして迫る人々が居ます。効果的ですので。

そういう場合には、テコで立ち向かうのではなく、「人間対人間」に持ち込むのがむしろ効果的ではないかなあ、と思ったりします。

人間、不安なので、いつも理屈（というテコ）が欲しいんですよ。子供におつかい一つ頼むにしても、「ちよつと腰が痛いから」みたいなテコを掛ける。

じゃ治つてから行けばいいじゃん。というテコ返しをすると、親子喧嘩になるわけです。

そうじゃなくて、「お願いしたいからお願いする」と言われたら、相手も、「いやだから拒否する」「特に断る理由もないので受けておく」と素直に決定できる。

僕もたいがいそういう傾向あるんですけど、モノ買う時とか理屈つけたがるんですよ。その選択が成功した、と自分で思い込みたいんです。でなければ愚か

である。

でもたいていの選択は実は理屈ではなくて、だいた
い決まっていますよね。

欲しいから買う。

ってだけで。むしろヘタなテコを掛けると、それに
引っ張られて失敗する。色とかね。真っ赤に惹かれた
のに、「僕に似合わないかな」とか言つてグレーにし
て、いつまでも「赤がよかつたかなあ……」とか。

ここでも「テコはずし」です。

教師が生徒の名前を覚えるのは、やはり「教師という立場」というテコと、「生徒という立場」というテコをカンカン打ちつけあつてても間接的なのが、そのテコを外し「田中先生」「山田君」になつた途端、距離がぐつと縮まるから、でしょう。

人懐っこい人はこのへんのテコの放り出し方が上手ですよね。やつぱり自分が手放さないと相手もなかなか放してくれない。

僕も本当に小心者で、常にテコ握つてビクビクしてるんですけど、もうちよつと勇氣持つて、時には手放さないと、といつも思います。

■テコと解脱

こんな感じで、「テコを手放す」と感情や想いの乱れがとてども収束しやすくなります。

それは言い方を換えれば「物事に執着しない」ということであり、そういう状態やその状態をキープできることを、「解脱」と呼ぶのではないですかね。

パツと本質とテコを分離できる。

そのテコをすぐ手放せる。

その流れが自動化されて、意識や力を使わなくても自然にできる。

おだやかな笑顔。

物事に執着しすぎると、ついには「突き抜けて」しまふうことがありますね。

中島敦先生の「名人伝」に、弓を見て「はてそれはなんでしたかいな？」とのたまふ弓の名人が出てきますが、弓というテコの使い方を極め尽くした結果、テコが自分自身の本質に混ざりこんでしまった、そんな

イメージではないでしょうか。

僕も実にしようもない例なんです。少年の頃あるアニメにハマったことがあります、ビデオ繰り返し観てグッズ片っ端から買い漁って（当時は今ほど商品展開豊富じゃないので、なんとか買ったんです）、ギョーッとのめり込んで、ある日、ぷつつ、と解脱しました。もう何も感興が湧かない。

いや、嫌いになったとかでは全然無いのです。飽き、ともちよつと違う。「おなかいっぱい」という満腹感でもない。

引つ掛かつてたテコの先端が外れて、スカッ、スカッ、と力掛けても対象が動かないことがありますよね。あんな感じ。

言語化すると、そのアニメというテコに対して僕はさんざんいろんなやり方で力を掛けてみて、動かしてみても、その結果も経験して、「もうこのテコに関しては他にやりようがない」というところまで、行つてしまつたのではないかと。

そうなるともうそのテコは、興味の対象外になつてしまいますよね。動かさず完璧にわかつてるので、必

要があればいつでも動かせるし。

生老病死、つまり人生そのものという大苦界からの解脱はなかなかそう簡単にできることではないですが、この程度のプチ解脱なら誰しも経験あるのではないでしょうか。

いやそれこそ、小さなテコからの離脱ならちよつと意志を振るえばできる。テコはそこにあるからキコキコ使っちゃうものです。なら目の前から消せばいい。

将棋の大山康晴名人がゴルフへ行つた時、「こんな楽しいことは将棋に悪い」と言い放つたそうです。

どんな大きな問題（テコ）でも「どうにもならぬい」ものはない、ように思えます。

■テコと飽き

オートポイエーシス研究の河本英夫先生の著書に「飽きる力」があります。全部はよく噛み砕けなかつ

たのですが、「飽きる」ことも大事なんだ、あるいは（意識や行動を）「遅らせる」ことも大切、とありまして、そこに引っ掛かりました。

執着、集中、高速化、高精細化、高密度化、高効率化、これらこそが善、その逆は悪、と思い込んでいたからです。

特に麺類などで顕著なんですけど、あまり量があったり工夫の無い品ですと、途中で「飽き」ますよね。

でも私達は井に入ってる分を一人前とする固定観念があつて、最後まで食べてしまう。

実はこんな不合理なことなくて、だって量も総カロリーもお店の大将が適当に決めたものであって、自分に合って無ければ途中で止めればいいだけのことです。その指標となるカラダからのサインこそ、「飽き」。

また、遅らせる、つまり「ゆっくりやる」と勢い・慣性によるオーバーシュートが防げます。要らないこと・やらなくていいことをしなくてすむ。

何度も指摘してますが、つまり最近怖いのは「不足」よりも「過剰」、 「足りなさ」よりも「やりす

ぎ」。テコの効かせすぎ、強力すぎるテコの暴走。

オートポイエーシスとは、僕の理解では、大雑把には、あるネットワークシステムはその内部で生態系が回っていて（出力が入力になって……生物球などをご想像いただけると）、人間の活動というのも結局、外部（環境）からのインプットに対して行動なりなんりのアウトプットを出している、のではなくて、実は自分で自発的に思い立ったことに自分で解を出しそれを回しているだけである、と。

この理屈で行くと、人間の内なるテコは、いったん形作って回り始めると、自ら巨大化・肥大化し、それが「現実」に取って代わる。

第二次世界大戦中の日本軍の負け戦を見ていますと、現場には正常な現状認識をしてる人がいくらでも居るのです。でも上層部が自ら作り出した「こうであるはずだ」というテコに囚われて、しがみついて、現実を見ない。無茶をする、当然、負ける。

同じようなことが今も繰返されていますし、もちろ

ん日本だけのことではありません。テコが人間の想像力や希望で形作られていくとするなら、普遍的な人間の本性のようです。

だから、「飽きる」「遅くする」ような、「テコを効かさない」方向の意識や行動を持つことは、これから結構重要なのかな、と思ったりします。

■ 主役はテコではない

「飽きる」「遅らせる」の他にも最近は、一見マイナスの言葉をよく見ます。

「降りる」とか。「スロー」「フードとか。「がんばらない」に「小さいまま」。

「降りていく人」といえばこんな話を読みました、東大出で出版社で一〇年バリバリ働いて、あとパツタリ二〇年無職、月五万円で生活、でも満足です、と。

具体的な生活模様が書かれていたのですが、確かに痩せ我慢でもなくなかなか楽しそうです。

もちろん諦めることや出来ないこともたくさんある

のでしよう、その代わり、余計なストレスや無駄なコストは掛からない。

人間は、身体性や時間という絶対量の決まってるリソースを、各テコに割り振って生きてます。

リソースそのものには各人にそんなに大きな差はない。それなのに生活に大きな差があるのはそれはテコのせいです。

どんなテコを、どう使っているのか。

それはその人の選択であり、いいも悪いもありません

ん。結果として現れる生活スタイルにも、誰も文句つけられません。

お金があろうとなかろうと、家族構成がどうであろうとどこに住もうとどう仕事をしようとして、その人が「こうならいいな」とイメージする方向に向かっているならば、それはよし。

だいじなのはテコじゃない。

テコそのものにマイナスもプラスもない。

五拾遺

■効き過ぎの実例

以前、いいトレッキングシューズ買ったんですよ。これ履き心地いいのはもとより、いくら歩いても足が痛くなりません。当時ダイエットしてたこともあって、毎日六キロ先の喫茶店まで散歩したりしてました。

で、ある日ふと、寝てると膝が痛いんです。横向き

になりますと膝と膝が重なるでしょう、そうするともう骨と骨が当たるようで痛い。触ってみますとなんだか熱を持ってて、しかも皮膚が薄皮のようになって、余分な脂肪が全然ない。

そしてついにある日、さあ歩くか、と家出た瞬間、なんの予兆も無く「かくっ」と膝が折れまして。

はい、もうおわかりですね、負担が全部膝に来てたんです。当然です、負担は無くなりなんかしない、どこかへ移動するだけ。

散歩の距離を減らし、次の靴は普通の靴を買いまし

た。

このように「たいへん強力なテコ」が日常に忍び込んでいるのです。使い方を間違えれば自分が痛い目に合うような、ピンピンの包丁が。

ほんの二〇年前ならそんなテコは余程のことがないと一般の人には手に入らなかつたのに。

たくさん歩けば足が痛い、これは当然です。その当然が見えなくなると、怖い。僕の膝のように、ある日いきなり、崩壊する。

現代のニュース見てますと、「この主張をしている人は、人の気持ちが変わらないのか」と思うことがあります。

その人が冷酷なのではなく、本当にわかってないのかもかもしれません。テコが効きすぎる環境に居て、効かない状態がイメージできない。

「六キロ往復なんか簡単だよー」

そのテコがあればね。

社会的弱者に対する無関心には、こういうメカニズムがあるのかも。

とにかく効き過ぎるテコは、怖いです。

■テコが消える？

逆に言えば、テコだと感じ取れないほど社会に溶け込んでしまっていていけば、それはあまり考えず使っているテコなのかもしれません……水道システムとか。

あ、でもそれも高度化しすぎててよくわからないことになってますね。水資源を外国資本が抑えに来てる、

どうするんだ！なんて話も聞きます。

このへん大変難しいのですが、「わからなければ触らない」の基準に基づいて、経済原則にしろナシヨナリズムにしろ簡単に根拠の薄いテコを振り回さない、というのが大事だと思います。本気でコミットするなら自らある程度納得できるまで、しつかり調べる必要が大切でしょう。

余談ですが、こういう時ネットはホントに補助的にしか使えなくて (S/N が悪すぎるのと偏りが大きすぎ

るので、基本的なことを学ぶのに逆に非効率）、やっぱり結局識者やちゃんとしたジャーナリスト諸氏の書物が、まだまだ大事ですね。

■テコのかたち

テコだけを観察すると、テコがテコのスイッチになつてゐる、つまり入れ子になつてたり、テコ同士がこつち効かせればこつち外れるトレードオフになつてたり、もう効き方想像できないほど複雑に絡んでたり、する

と思うんですけど、それを研究しだすとまた大変にめんどくさいので、「目の前のこのテコを下げるとどうなるやら？」から考え直せばいいのではないか、と思います。

テコあんまり見据え過ぎると、テコに取り込まれちゃうんですね。

ニーチェの言葉です、「深淵を覗くものは深淵に覗かれる」。

■同じ名前で違うテコ

ポイントカードとか。

家電量販店のそれはわりとお店・お客 Win-Win で納得いくんですよね。でもコンビニのはどうですか。

僕はある系列で（おそらくそう決められてるのでしよう）毎回持つてるか聞かれるのが、かなり不快です。勧誘の小冊子読んでも実に微々たるメリットか興味の無いメリットばかりで、常に持ち歩いて毎回買い物たびに取り出すという莫大なコストを払う意義を全く感じられない。

これってみんな、「ポイントカードというテコはいいテコ」という今までの経験からくる思い込みに騙されてませんか。

もちろん向こうはそのつもりで引っ掛けに来てる。

こちらに微々たるものでも彼らにとつては数百万人分になりますから、業績に影響するようなサイズになる。「地球のみんな、オラの口座に一円ずつ寄付してくれ！」というヤツです。

そんなテコに乗る義理は無いと思うのですが。

このように、「同じようなもの」でも違う効果を持つテコになってるのがまた難しいですね。だから「活用」はもはや難しいのです。もしそれでも取り掛かるとするならば、前述のように、先入観や常識を排してフラットに見る、ジャーナリストみたいな目が必要ですね。

いまメディアが凄く頼りないんですよ。（もちろん対象や記者により素晴らしいものもあります）だからって口コミみたいな素人の批評は全くアテにできませんし、つまり「なにかについて判断を下す」とい

うコストが異常に高騰してしまっている。

ので、ますます「最適なテコを選び活用する」なんてのは机上の空論じゃないか、と思うわけです。

ポイントカード財布に一杯入ってますよね。お店にとつては一枚なんですよ。僕らにとつてはたまに行く可能性のあるお店ってだけで何十店もあるわけで。

非対称性っていうんですかね、そういうのが、もう限界に近いほど膨らんでしまってる気がします。

もう忘れてしまう他ない（笑）

■ テコと自明性

前述した僕の持論なんですけど、「判断」というのは極めて重いタスクなので、人間でできるだけ「判断」したくないんです。

同じ経験を何度かすると簡単に「常識」化して、ラベリングして、オートマチックに「仕分け」（もはや判断ではない）するようになる。トヨタのクルマだから安心だ。

これらが重なって、「世界はきつとこうだ」という自明性が成立するわけです。こうなると、楽で簡単な「この世界」つまり自明性を壊されることに極端な拒否反応が出る。

たとえばトヨタ車のリコールがあったとして「トヨタの品質管理も甘くなつたね」なんて言おうもんならものすごい反発を喰らう。

これはトヨタとトヨタ車を擁護してる「のではなく」、それらに信頼を置いてた「自分の世界」を守っているのです。

「俺のトヨタが不具合あるなんて、そんなの嘘っぱち

だ！」

こう書くとそれがどれほど無茶苦茶な思考の流れか、誰にでも簡単にわかります、でも、これに類したこと
を日々、私も、貴方もやっている。たぶん。

比喩抜きで、「神様なんか居ないよ」と言われた時
の聖職者の反応と同じ。その意見そのものが、自分の
精神・物質世界を壊しに来る悪魔、なのです。

じつは、人間の生活で一番大きく掛かってる見えな
いテコはこの、自明性ではないか、と思ったりします。

もちろんこのテコの効きに日々恩恵を受けてるわけです、バーガー屋さんに入つて「このバーガーには毒が入ってるかもしれない」と一々疑つてては生活が営めません。

生活が複雑になるほどにこのテコは肥大化し強力になつていく。そうしないと「判断」が増えて、やつてられない。

でも、スーパーでぽつと買った餃子に毒入ってる時代なんですよね。

自明性というテコはあくまでテコでしかなく、現実、事実ではない。

この矛盾の大きさがこれ以上大きくなると、人間の繊細な神経は耐えられないのかも、しれない。

成長期と違って現在の日本には、将来に夢や希望があんまりない。そうすると、「変化」は博打になり、「今の世界」を喪う可能性がある。だから、「変化」は絶対的に拒否すべきものであり、数字や理屈ではないのです。

おそらくこれは人間の本性であつて、中世という安定（停滞）した世界において魔女狩りに参加した人々の多くは、普通の善良な人間だったんだろうと思ひます。

魔女は悪いから指弾されるのではなく、この我らが天地を突き崩す「綻び」だからこそ、消えてなくならなければならぬ。

いちばん真ん中にいる「じぶん」が語るのではなく、自明性のテコに振り回されている。

この魔女狩りに対抗するためにはもちろん、「夢や希望を持てるヴィジョンを描く」、個人としても、というのが本筋です。

「これ頑張ろう」と目標に向かってる時って、いわば新しいテコを作ってる最中なので、古いテコを捨てることに抵抗が薄いんですよね。

たぶんまずこれがひとつ。

でもそこまできなければ、せめて自明性というテコを節目節目で意識することで、「常識」を疑って掛かるのがいいのかもしれない。

なかなかそれも難しいんですけどね……

仏教で言うところの「無明」、あるいはキリスト教における「原罪」。昔の偉い人は「わかったような気になるな」と戒めています。

それは単なるテクではないか？

おまえの深いところから出てきた、「ほんとうのこ
と」なのか？

「芸術」に意義があるとするならひとつにはこの、「
『自明性』に風穴を開けること」、なのかもしれま

せん。

いや逆、風穴を開けるものをこそ、「芸術」という。だから美味しい料理も素晴らしいおもてなしも、人の手の加わらない自然の造形でさえ、そう言われる。

ただ心地良いだけではなく、視覚に聴覚に思考に感情に刺さる。その瞬間、世界はじぶんが普段意識している他にも広がっていること、いかようにでも変化していること、を意識する。

それが上記のような自明性の罠に、無明に原罪に陥ることを防ぎ、あるいは堕ちた陥穽から這い上がる一筋の糸になる。

その力を認めているからこそ、古よりあんななんの役にも立たないものが、いや、だからこの理屈からいえば、「なんの役にも立たないほうが」つまり日常を蝕むほうが、残ってる、わけです。

その力が強力で普遍的なものほど、「いい作品」なのでしよう。

六 おわりに

■ お礼

軽い小文のつもりだったのにテコをガツガツ掛け過ぎました。このへんで。

・ 僕らの生活はさまざまなたテコに取り囲まれてて
・ 技術の進歩などで、そのテコは必要以上に非常に強力になって

・取り扱いにストレスを感じたり、実際失敗してケガをしたりするようになっていく

・それに対するには、まずそのテコをイメージして

・そのテコを「てばなす」という選択肢があることを
思い出し（活用するでも・拒否するでもない）

・思い切つて、てばなす。

・とまあ、楽になつたりストレスが減つたり、するの
ではないですか

というようなことです。似た話繰り返してすいません。

まあ、たいていのテコは、手放しても死にはしませんよ。逆に言えば、「お墓に持つて行けないもの」は、単なるテコです。

金や名誉や、愛でさえ。

家族に信頼、生きがいですらそうです。

手放したって、「じぶん」は生き続けるもの。

「じぶん」がどう生きるかにテコを使うわけで、テコを使うために生きてるわけじゃない。

「このテコのために生きている」という頼れる感覚は甘い誘惑ですが、それに寄りかかることこそ穏やかな死かもしれない。

この矛盾こそが生きることの「苦」なんでしょうね。
テコに頼らなければ永遠の孤独。頼ればそれは、

「生」ではない。

あーめんどくさ（笑）

長々お読みいただき、ありがとうございます。ま
たどこかでお会いできれば。

二〇一二年夏　ながたかずひさ

■ おくづけ

「テコをてばなす」

作者 ながたかずひさ

発行 サークル 「PowerNetwork!」

発行日 2012.8.12

mail nagata@mti.biglobe.ne.jp

web <http://rakken.net/>

twitterID KazuhisaNagata